プレゼントはダイヤモンドスノー

グランシェス(エドワード)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プレゼントはダイヤモンドスノー

【Ｎコード】
Ｎ４９３１Ｐ

【作者名】
グランシェス（エドワード）

【あらすじ】
今年の冬は例年に比べて雪が少ない
そして雪が少ない事でイライラする人間は少なくない
俺、我原（あがはら）　雪崩（なだれ）も例外ではない・・・

（前書き）

シリーズ「ダイヤモンドスノーラブストーリー」
とりあえず設定
我原　雪崩（あがはら　なだれ）
２０代の男性
スノーボーダーで子供っぽい所がある
白雪に告白して現在に至る

燎　霙（かがりび　みぞれ）
２０代の男性
スキーヤーで年齢より上に見られがち
自分の名前が女っぽい事を気にしている

燎　白雪（かがりび　しらゆき）
兄より３つしたの女性
雪崩の恋人で清楚な感じだがちょっと天然系で少しズレている
兄と一緒に雪山でスキーをしていてはぐれた事で雪崩と出会い現在に至る

今年の冬は例年に比べて雪が少ない
そして雪が少ない事でイライラする人間は少なくない
俺、我原（あがはら）　雪崩（なだれ）も例外ではない

雪崩「あ～イライラする・・・」
俺は腕を組み足でリズムを取るように足踏みして呟く
今年は雪が少なくおまけに今日は季節外れの台風で外にすら出れない
霙「おいおい・・・そんな事しても何にも解決しないだろ？」
こいつは燎（かがりび）・　霙（みぞれ）
女っぽい名前だが雪山で出会い同じ冬の名前って事で親友になった
椅子に座りながらそんなことを言いコーヒーを飲む霙
雪崩「だからってこれじゃ・・・」
そう言いながら俺は激しい雨が打ちつける窓を見る
外は大雨で街灯すら見えないありさまだ
霙「まぁ白雪には悪いが・・・今年は中止だな」
コーヒーを飲み終えコップを片付ける霙
白雪と言うのはこいつの妹で俺の恋人
毎年冬に三人でスキーをしている
まぁ・・・俺はスノーボードだけどな
何故俺がこいつと一緒かと言うと・・・

前日
雪崩「ふぅ・・・やっと買い終わった」
俺は玄関に大量の荷物を置き一人呟きながら額の汗を腕で拭う
買い込んだのは豚バラ、豆腐にネギ等鍋の材料
そう、今夜は鍋
雪崩「しかし・・・この量を一人で食うのは大変だな・・・」

安売りだったから大量に買いこんでしまった
俺は苦笑いし頭を掻きながら玄関の材料を見て悩む
雪崩「ん～・・・白雪たちを呼ぶか・・・」
ポケットから携帯を取り出し白雪の自宅の番号を押す
携帯にベル音が響き鳴りガチャリと言う音がした
霙「もしも～し？」
霙の間抜けな声が聞こえる
雪崩「お、おぅ霙か、白雪は？」
俺はてっきり白雪が出ると思っていたから少し驚く
霙「はぁ？」
受話器から大声が聞こえた
うるさいので受話器を放す
大声が聞こえなくり俺は受話器に再び耳を近づける
霙「白雪ならさっきお前の家に行くって・・・来てないのか？」
心配そうな声が聞こえる
その時ドアのチャイムが鳴る
俺が携帯片手にドアを開けると白雪が居た
雪崩「あ～・・・悪い今、来た・・・」
俺は霙に言い訳っぽく話す
霙「お前な・・・で白雪に何の用事だったんだ？」
霙の声は少し呆れ気味だった
雪崩「まぁ・・・お前も誘うつもりだから言うけどな。鍋しようぜ、鍋」
目の前にいる白雪にも聞こえるように言い俺は笑顔で親指を立てる
霙「はぁ？　いつもは一人で鍋するくせに今日はどうしたんだよ？」
突発過ぎて呆れられてしまった
しかし、白雪は頷いている
雪崩「あ～・・・今日は安売りで・・・」
俺は歯切れが悪く霙に説明しはじめる
霙「・・・ようするに食いきれないからこいってか？」

電話からは呆れ過ぎた霙の溜息が聞こえる
雪崩「まぁ・・・そういうことだ・・・」
俺は電話に向って頷きながら返事をする
それを白雪はクスクスと笑っている
霙「わーた、俺も今から行くから準備始めててくれ」
霙がそう言うと俺が返事する前に電話を切られてしまった
雪崩「悪いな、白雪」
俺は苦笑いで頭を掻く
白雪「ううん、それよりお兄ちゃんが何か言ってた？」
兄にまったく似ず清楚な感じが俺の心を癒す
これにホレたのは事実
雪崩「先に鍋の準備をしててくれってさ」
俺は少し溜息を漏らす
すると白雪は少し戸惑う
白雪「じゃ、じゃあ、これ持つの手伝います」
白雪は荷物を持とうとする
雪崩「あ～いいよいいよ、荷物は俺が運ぶから白雪には鍋とかの方をお願いするよ」
俺は荷物を持とうと袋に手を伸ばす白雪の手を止めて袋を持つ
狭い玄関を白雪は俺と密着しながらすれ違い中に入っていく
俺は密着したので少し顔を赤らめてしまった
白雪が入っていった後、俺は荷物を手際よく中に運ぶ
そして白雪が鍋を探し始め俺は袋から材料を出す
白雪「え～っと～・・・」
様子を見る限りどうやら鍋が見つからないらしい
雪崩「あ～・・・鍋は下の奥の方に入れたと思うから」
材料を出し終えた俺はカセットコンロを探しに玄関近くの押入に向う
俺がカセットコンロを探しているとドアのチャイムが鳴る
俺は探すのを中断して玄関を開ける
霙「よっ」

霙は左手をズボンのポケットに入れ右手を上げて挨拶する
雪崩「早いな・・・まだ鍋が出来る状態じゃねぇぞ？」
俺は少し引き気味で迎え入れる
霙「う～・・・すぐに食えると思ったんだけどなぁ・・・」
頭を掻きながら少しがっかりする霙
雪崩「んな事より来たなら手伝え」
霙「って、痛って、おい、痛て～って」
俺は突き飛ばすような感じで霙を奥に追いやる
霙を奥に追いやった後は再びカセットコンロを探す
雪崩「ぅ・・・こんな所にあったし・・・」
押入の奥の方から箱に入ったカセットコンロが埃をかぶって出てきた
俺は埃を払いながらダイニングキッチンに持っていく
霙「遅いぞ～」
鍋を出し終えた白雪と霙が野菜を切っている
霙は包丁を振りかざして言うものだから白雪は手を止めてが引いている
雪崩「おい、危ねぇって。白雪が怪我するだろ」
俺は霙の振り上げている手を見ながらカセットコンロをテーブルの上に置く

下ごしらえを終え鍋が始まる
霙「早く出来ねーかなぁ・・・」
そうは言うがすぐに出来るはずもない
とりあえず鍋が出来る
霙「うっし、俺が一番乗り～」
白雪が鍋を開けると霙が手を伸ばす
雪崩「おまっ、ズリぃぞ」
霙の後になってしまったが俺も手を伸ばす
白雪「私も食べようっと」
白雪も手を伸ばす

量が多く具材を取り合う事は無かったが久しぶりに誰かと鍋をした
気がした
鍋を食べ追えると霙が椅子の背もたれにもたれかかる
俺と白雪は食べ終えた鍋をキッチンに持っていき洗い始める
雪崩「明日は雪山行かね？」
霙にも聞こえるように大声で聞く
霙「あ～・・・そうだな」
間抜けな返事が返ってくる
白雪「私も行きたいな」
白雪が頬を赤らめて答える
そんなこんなで洗い物が終わり
しばらくリビングで遊ぶ
そして眠りについて今日の季節外れの台風と言うわけだ

霙「しっかし、季節外れの台風だなんてな・・・」
片付けが終わり椅子に座ってテレビを見ながら言う霙
雪崩「いつ晴れるんだよぉぉぉ」
俺は窓を軽く叩き項垂れる
霙「まぁ・・・いつかは晴れるだろ？」
霙は呆れて答える
と言うのも今朝からこの調子だからだ
白雪「雪崩って本当に子供みたいだね」
クスクス笑う白雪
霙「子供みたいってよりガキだな」
テレビのチャンネルを変えながら答える霙
雪崩「ガキだとぉ」
俺は窓から離れ霙に近づいていく
霙「ガキにガキって言って何が悪い」
霙は椅子から立ち上がり逃げる
白雪「二人とも辞めて・・・近所迷惑になるよ」

マンションを心配してか二人を宥める白雪
そんな事を繰り返し時間が過ぎていく

雪崩「腹減ったな・・・」
椅子に座っている状態でテーブルにへたり込む
霙「だな・・・」
同様に霙もへたり込む
白雪「待っててもうちょっとで出来るから」
白雪はキッチンで何かを作っている
へたり込んでいる状態からでは何を作っているかは見えないが
匂いからしてカレーだろう
それから少ししして夕飯が出来た
夕飯はもちろんカレー・・・？
雪崩「白雪・・・これ何？」
俺は目を細め白雪に聞く
白雪「何って・・・カレーそばだよ？」
確かにカレーそばには違いないが・・・少しおかしい
何がおかしいかと言うとそばの上にカレーとハンバーグが乗っているからだ
雪崩「なぁ・・・カレーそばって普通ハンバーグ乗せるか？」
目の前の霙に聞く
霙「あれ？　これが普通じゃね？」
霙は普通に食べている
どうやら霙に聞いたのは間違いだったようだ
雪崩「まぁ・・・いいや、いただきま～す」
俺は食べ始める
雪崩「う・・・うめぇ」
味に少し感激したが見た目は違和感が残る
白雪「よかった～、うちじゃこれがいつも食べるカレーそばだから」
俺の感想に安心したのか笑顔になり白雪も食べ始める

食べ終えると霙はテーブルにへたり込む
雪崩「だらしねぇなぁ・・・」
俺はそんな霙を横目に食べた食器をキッチンに持っていく
俺が食器を洗っていると白雪が霙の分の食器も持ってキッチンに来る
白雪「ごめんね・・・お兄ちゃんいつもあんなんだから」
照れくさそうに目を逸らして白雪が食器を洗い始める
白雪の事は付き合い始めてしばらくするからある程度わかるが
霙の事には意外とビックリした
雪崩「まぁ・・・仕方ねぇと思う」
そんな事を言ってる間に洗い物は終わった

そして前日と同様に遊び眠る
そんな事が４日程続き、台風が過ぎた

雪崩「ん～ん、ふぅ、やっと晴れたな～」
俺はベランダで背伸びをして呟く
霙「うっす、お、やっと台風が過ぎたか」
やっと起きてきたらしい霙がベランダに出てくる
部屋を見ると白雪が朝食の準備を始めている
霙「晴れたしな・・・一度俺は家に帰るわ」
そう言って玄関に向い始める霙
途中、白雪に同じ事を言う
白雪「えっ？！　お兄ちゃん朝ご飯どうするの？」
白雪が驚いて霙に聞く声がベランダにも聞こえる
霙は何か返事したらしい
そのまま霙が玄関を出てドアが閉まる音が響く
俺が部屋に戻ると白雪が頬を赤らめた
雪崩「どうした？白雪」
白雪「う、ううん、なんでも無いよ」

そう言って白雪は朝食の準備を続ける
どうやら霙の返事が原因のようだ
雪崩「大方、二人の邪魔をしたら～とかなんとか言ってたんだろう」
俺はそんな事を言ってソファに座る
白雪は更に赤くなっている
どうやら図星らしい
雪崩「ったく・・・二人の邪魔をしたら～ってなぁ・・・それ言ったら台風の間はずっと邪魔だったっての」
そんな事を呟きテレビをつける
それから１０分程二人の間に沈黙が続く
白雪「な、雪崩・・・朝食が出来たよ」
沈黙を破ったのは白雪だった
だがなんだかぎこちない・・・
雪崩「何、緊張してんだ？」
俺は平然とテーブルに向う
白雪は顔を真っ赤にして朝食を並べている
雪崩「あ～・・・そうか、俺の家で二人きりって初めてだったな」
俺も少し顔を赤くするもすぐに恋人という事を思い出す
雪崩「でも、俺たち恋人なんだしあっても別に不思議じゃないだろ？」
その一言で白雪から赤みが少しとれた
どうやら納得して落ち着いたらしい
俺と白雪の時間がしばらくの間流れた
朝食を食べ終え食器をキッチンに持っていき洗い始める
食器を洗い片付けをする
雪崩「あ～・・・そうだ、携帯の番号聞いてなかった」
俺がそう言うと白雪が困惑した
雪崩「自宅は聞いていたけどさ、携帯の番号は聞いてなかったじゃんか」
そう言うと俺は近くにあったメモ帳を渡す

白雪は困惑しながらも自分の携帯の番号を書く
そしてお互いに確認して白雪は帰っていった

それからしばらくして
俺は白雪の携帯に電話する
雪崩「あ～・・・白雪？　雪崩だけど・・・」
そうして俺は白雪の仕事が休みの日を聞いた
そして自分の休みと同じ日に日帰りで雪山に行こうと誘った
白雪「あれ・・・いつもはお兄ちゃんも一緒なのに・・・」
電話の白雪は困惑している
雪崩「今回は白雪とだけ行きたいんだ」
確かに今までは何かと霙も一緒だったが一度くらい白雪とだけ行きたかった
その熱心が伝わったのか白雪はＯＫしてくれた

そして当日
俺は燎家に車を走らせ白雪を迎えに行く
燎家の門前に着くと車を降り門のチャイムを鳴らす
白雪「お待たせ」
霙「雪崩、ずりぃぞ・・・」
白雪はスキー道具を持って出てきた
霙は軽装で涙目だ
どうやら、白雪が話していたらしい
雪崩「あ～荷物は俺が持つから先に車に乗ってて」
俺は白雪から道具を受け取る
白雪は助手席のドアを開け乗り込む
俺は白雪のスキー道具を後ろに積む
霙「・・・二人の邪魔する気は無いけども・・・」
霙が積み終えた頃に近づいてきた
霙「白雪を泣かせたら・・・」

怒りをこめた目で俺を睨む霙
雪崩「わーってるって、それ以前に泣かせたら戸惑っちまうって・・・」
俺は頭を掻きながら苦笑いして後ろのドアを閉める
そして俺は運転席に乗る
その頃には霙は涙目ながらもちゃんと送り出してくれた

それからあまり会話もせずに雪山につく
俺が白雪を連れてきた雪山は人が少なく霙も知らない場所だった
車を止め荷物を持ち山を登り始める
とは言ってもスキー場と変わらぬそこはちゃんと設備が整っていた
俺はホテル兼の小屋で手続きを済ませると
白雪を連れて再び登る
雪崩「・・・今日、誕生日だっただろ？」
白雪「うん・・・」
白雪が頬を赤らめる
二人の休みは丁度、白雪の誕生日の日だった
雪崩「まぁプレゼントが思いつかなかった・・・だからこれで勘弁してくれな」
俺は照れながら頭を掻く
白雪「ありがと、雪崩」
白雪は赤くなりながらも俺の頬にキスをしてくれた
俺も赤くなり照れる
俺が連れてきたのは人がめったに来ないダイヤモンドのように光を反射して輝く雪原だ
雪崩「とりあえず、滑ろうぜ」
そう言って俺たちは滑り始める

二人きりの雪原を思いっきり楽しみ
俺たちはまた一歩近づいたような気がした

（後書き）

短編第４弾ついでに季節物第２弾～ｗ
とりあえず『クリスマス』の二日後に作った作品
こちらでの公開は毎週月曜日なので年越し直後になってしまいました
恋愛物が続いた事には少々後悔

とは言っても今までより結構長めの短編だったりする
途中の台風直撃で外出不能のシーンは結構時間をかけましたね・・・
と言っても長めの短編なので５時間くらいで完成しましたね
片割れ（プロフィール参照）と違いエロのシーンはないですね
ですが、歯が浮くような台詞があったりします
自分でもよくこんな台詞が出たと思います

さて、ここまで読んで頂きありがとうございました
他の作品もよろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4931p/

プレゼントはダイヤモンドスノー

2011年10月8日12時28分発行